

はじめに

— 知的なものへの魅惑のために —

現代は、「学び」の崩壊と再生の時代である。

ゆとり教育のまっただなかに育った学部新入生を見ていると、素直でのびのびとした言動に今風の若者らしさを感じずる反面、彼らに講義をしてみると生物学の基本すら学び終えていない知識の頼りなさが、ありありとかいま見える。従って大学生とは言えども、低学年ではまずこの学部教育に必要とされる知識とのギャップの大きさを埋める作業からスタートせねばならない。

知的なものへの「魅惑」を感じずるようになるには、知的体系の初期の部分の「たたき込み」（一般に丸暗記という言葉が使われる）によってスタートするしか到達する方法がないのであるが、ゆとり世代とは、いわばこの「丸暗記」を忌避してきた、としか思えない集団なのである。看護学部の初期教育を担当する教員は学生の知的作業の「再生」からスタートせねばならないのである。

ネットに情報を公開することは名もなき多くの人達（マス）に対して需要を喚起する可能性がある、ということである。本プロジェクトが「オープン」と「バーチャル」という二つの受講形態を持ち、参加を希望する方達にそのうちのどちらも選択可能としたのは、この後者の「バーチャル」に密かな起爆材を仕込みたかったからである。それは何か、と言えれば複線化した看護教育課程を終えて社会人となった看護職の方達には、この「知的なものへの魅惑」を体感しないまま職業人として働き始めている方が多い、と思われるからである。

医学部ではすべての学生が6年の年月をかけて手厚く教育されて卒業するが、それでも「知的なものへの魅惑」を実感することなく、テクニカルに国家試験に合格して資格を得ている学生も少なくない、と思われる。ましてや看護の教育は本学のような4年制大学の数が急増してきたとは言え、いまだ専門学校において教育を受けている方のほうが数も多い（今年の卒業生で、大卒の約3倍）。単に併存しているばかりか、基本資格にも准看護師資格があり、その資格で働いている方も無視できない。これらの方達に「気後れ」なしにこのバーチャルに構築された講義を受講することで、大学教育の魅力を実現して頂きたい、と願ってやまない。そしてそのうちのわずかな方にでも、この「知的なものへの魅惑」を感じて頂ければ、と心から願っている。

3年目を迎えた本プロジェクトはいよいよ本番である。

平成20年3月

新潟県立看護大学 看護研究交流センター
センター長 吉山直樹